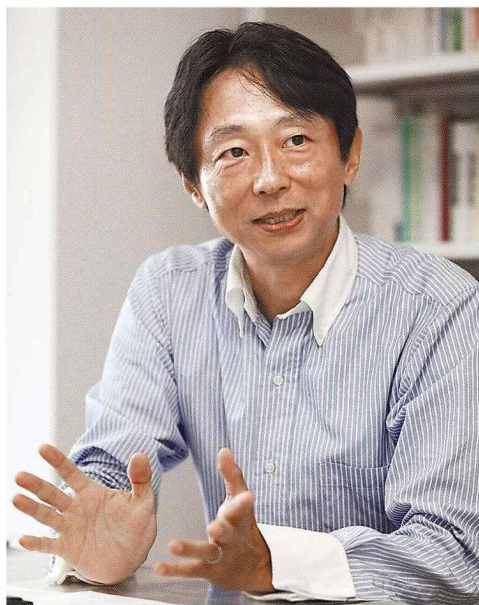


# — 新型コロナ禍 克服への 提言

「ナッジ」という言葉がある。相手が迷っている時などに「こうしたらどう？」と、肘でどんとつつくように選択を促すことを意味する。「こうしろ」と強制したり「こうしてはいけない」と禁止したりするのはない。選択の自由を残しつつ、望ましい行動に人を振り向ける方法として近年注目されている。新型コロナウィルスの感染拡大で個人の行動変容が求められる中、こうした工夫をもっと活用できないか。

北大大学院経済学研究院教授

橋本 努氏



はしもと・つとむ 1967年東京都生まれ。横浜国大卒。東大で博士号。専門は経済社会学。96年に北大へ。2011年から現職。「帝国の条件」「ポスト近代」など著書多数。5月に共編著「ナッジ!？」（勁草書房）を出版した。

い。社会全体にストレスがたまり、暴走しかねない。なるべく負荷をかけないようにならなければならない。さらなる感染拡大に備えて行動変容するにはどうすればいいか、今こそ考えないといけない。人と人の距離を取りつつも、互いにナッジし合える人間関係を再構築することが大事になる。

（編集委員 関口裕士）

## 人の行動変化 促す「仕掛け」共有して

こうした行動変容が大事だと頭で分かっているけど、なかなか実践できない。だが、ちょっとした仕掛けで軽く背中を押せば行動に移せることがある。「こうすべきだ」と理性に働きかけるよりも感覚や感情に訴える方が行動を変えやすい。

ナッジはかねて省エネ行動の促進やごみの減量など、環境問題への対策として取り入れられてきた。今も、例えばJR札幌駅の待合室では1席ごとにカードを置いて人と人の距離を保とうとしている。人混みを減らすには、電車の混雑状況を駅に表示することも有効だろう。駅のアナウンスや店で流す音楽の音量を下げるのもいい。静かなれば人がしゃべる声も小さくなり、飛沫感染のリスクも下がる。自宅にいたくなるような仕掛けも考えられるだろう。

そうしたアイデアを、日々の生活の中で見つけている人は多いはずだ。しかし、それを伝える手段がない。共有する制度がない。横浜市や兵庫県尼崎市は市内に専門のチームをつくり、こうしたアイデアを政策に生かそうとしている。道や札幌市をはじめ道内自治体も取り組んでほしい。そこに寄せられるいろんな提案から、新しい日常が生まれる可能性もある。

もちろんナッジだけでは強制や禁止、あるいは個人が全て意識的に考えて行動することは負担が大き